



ギャラリーとは特殊な職種である。唯場所を貸すといった不動産的な役割を果たすわけでは決して無い。まず古美術と現代美術に区分され、次に貸し画廊、コマーシャル画廊、オルタナティブ・スペースと様々に呼称され、更に学生やサラリーマンという美術に馴染みのない者達に美術の素晴らしさを伝える画廊、先端の美術を紹介する画廊、美術館に作品を収蔵させる画廊、国内ではなく世界に向けてビジネスを行う画廊など様々であっても、共通すべきことは、作者と作品を「支援」するのではなく、「存在して良いという勇気を与えること」であると、私は考えている。

このように、画廊は画廊によってコレクションする動機が異なっていく。投資目的のビジネスをする画廊は売れる作品を、企画画廊は時代を代表し後世に残す作品を、個人画廊はあくまでも画廊主の個性と感覚によって集める場合と、多種多様である。同じ作家の活動初期から追って収集する、抽象/具象、日本画/油彩画、時間が共時的な作品群、若手やヴェテランに限定するなど、更に細分化された発想が導き出される。そしてコレクションとは、究極的には見せるための対外的なもの、自己と自己に近い存在が楽しむ内向的なものに区別される。

ギャラリー睦のコレクションは、画廊主の顔が見えてくる。貴重で謙虚な松田正平、馬場彬、長谷川証信の作品である。

画廊主の顔が見えることは重要である。それによって、画廊主ではなく画廊の性質が剥き出しになるからである。剥き出しであることは極端な話、攻撃に対して無防備となる。しかし全てを晒さなければ、現代美術の展覧は不可能になる。何故なら現代美術作品そのものが、権威を排除する為に無防備であるからだ。そして仮に仮面を被って暴力に対して防御すれば、それは既に現代美術の範疇から外れることになってしまう。画廊主は現代美術を全身で、あらゆる誹謗中傷だけではなく攻撃から死守しなければならない。その姿勢が、コレクションによって顕わとなる。

そのようなギャラリー睦の姿勢を理解して、ステップスギャラリーの吉岡は作品を点描的に展示した。この展示方法によって、個々の作品に集中することも出来るし、全体像として把握することも可能となる。一点一点の作品が持つ意味を壊さずに、ギャラリー睦コレクションの特徴を直観的に示しているのだ。著名な作家、無名のままこの世を去った作家というヒエラルキーを排除し、作品は独立した存在として、ギャラリーに訪れた人々にその主張を直接に伝える。そこには静謐な空気が流れていた。もしかしたら、それは耳には届かない一つの音楽であるのかも知れない。

そしてギャラリー睦の鼓動と呼吸が聴こえて来る。現代美術は時間を経ても、常に「いま、ここ」に存在する。

